になる。

（何が起こっているんだ？）

混乱する頭で必死に考えるが、答えは出ない。ただひたすら快楽が体を襲う。

「ひぎぃい!!　すごおおお！！！中ァア!!　しゅごおおお！！！」

普段の優等生じみた顔は蕩けてしまい、舌を突き出し間抜けな声を上げる。

「いいねいいね葵君！　すごくいいよぉ!!」

パン！　パン！　パン！　パン！　激しく打ち付けられる音と結合部から響く水音がさらに興奮させる。自分が犯されている事実に気づいた瞬間、葵の体が震える。それすら快感に変わる。

「やめてぇぇぇ！！！イぐぅぅぅぅ！！！」

「うん!!　気持ちいいねぇ!!　イキ狂っちゃいなさい!!」

「おひいいいい!!」

ペニスと睾丸がぷるぷる震える。びゅるるっと勢いよく射精し、そのまま葵の体は崩れ落ちる。

「ああ。教授を高い酒を飲ませて酔い潰した甲斐があったね。君は実に素質がある」
「あぁあ……なんでぇ……」
「んん？？？葵君は政界に興味があるんだろう？」
「はい……」
「だったら！　今君が何をすべきか、わかっているだろう？」
「あっ、ひぃん…」
クソクソクソクソ。酒が少し抜けてきた葵は考えた。東剛議員はこうして、色んなものを影で牛耳っているわけだ。
「しかし、経験なしと言っていたくせにこんなにクソ雑魚ケツマンコだとは思わなかったよ、葵君」
「なっ…！」
羞恥で顔が赤くなる。違う、だって、自分は。
「じゃあ、もう一回ヤらせてもらおうかな！」
再び挿入され、ピストン運動が始まる。今度は最初から本気の突きだ。

「おっ、おぉおお！！！」
先程より激しい動きに葵は再び絶頂を迎える。もはや思考能力はほぼ残っていない。
「おほ、んほ！　おほぉおお！　くそ！　すご、チンポすご♡議員チンポすごいいいいい♡♡」
「おや？　もう堕ちたのかな」
東剛は満足げな表情を浮かべると、ずるりと何故かチンポを引き抜いた。快楽を途中で止められた葵は思わず振り返る。
「なっ、どうして⁉」
「葵君が雑魚マンコ過ぎてねぇ。萎えてしまったよ。やっぱり遊んでいるからかな？」
「そんな…！　違う…違います…」
「ん？　何がかね？」
「後ろは、その…」
初めてなのだ、そう小さな声で呟く。その一言に中年男は一層いやらしい笑みを浮かべた。

「じゃあ葵君は処女だったんだねぇ」
「あっ…」
「それならちゃんと、処女を奪ってくれたおちんぽ様にご挨拶しないと」
「んおお…」
すりすりと葵の後ろを犯していたチンポで顔を擦る。ぬるぬるした感触に目を閉じてうっとりしている。
「さあ、ご挨拶だよ。どう言うかわかるよね？」
びたんびたんとチンポビンタを繰り返しながら脳に直接語りかけるように卑猥な言葉を囁き続ける。葵はよろよろとベッドに腰掛けるとＡＶ女優のように足を広げ、アナルを晒す。外気に触れてひんやりとして気持ちいい。
「ぼ、僕の、葵の処女まんこ、議員様のおちんぽ様でオナホに、クソ雑魚ケツマンコにしてください♡」
「よく言えました！」
「んぁあああああ！」